

東海遊子吟

サレフ峯頭の吟

綠樹蔭暗き千仞の崖

下には大野遠く烟ふり

右は白帆漣漪を引いて

白鷗また飛ぶ藍光の湖水

名邑次第に相並び

勝區互に美を競ふ

汀灣廻りて六十里

そこにルーソー其生をうけ

そこにラルテイエア枯腸をしぼり

土井 晩 翠

そこにギボン大史を編み

そこにバイロン囚者を詠みし

ゼネワの鏡湖レーマンの水

げにや千載功業のあと

鴻の大空に去る如く

文名はたまた不朽に鏤らず

たい山川さんげんのおほいなる

巧みのあとの新たなる

高きにのぼり遠きを望み

逝けるを傷み生けるを忍ぶ

飄遊今われ三春秋

閑雲一片心なく

長空かくる跡をや見えむ。

さりや、暮行く夕の雲

人界の子の悟らざる

惱みは中に宿らずや、

天地の情をその胸に

山河の影をその袖に

包みて過ぎ去る何のほとり。

行くゑかあなた一黛の青螺

夢むる如き暮山のあなた

かれ佛蘭士の夕空か。

五天の東八千里

ヒマラヤ暮雪の嶺の下

遺文を探し求め来て

客衣ふたゝびセイヌの水に

洗ひ灑ぎし好學士

魂は異郷に迷はずや。

聞くまた再び故郷のたより、

清きを名に負ふ緇衣の賢

澤畔の行吟それならなくに

仰ぎし眞如の月黒く

隠ると聞きぬ西の空。

更に骨肉恩愛の彼れ

不敏の兄に仕へ来て

盡しゝ思報はれず

故山の英を摘み送る

にほひ、紅、色、深、き

誠は遂に人の世に

また見るべくもあらずとや、

誰が涙痕に濕へる

文や蒼烟夕の空に

何等の星の涙添へて

こゝに飄浪の客衣の袖

搾れとせむる無限の恨

紅雲夕べに暮るゝ影に

樂しかりしの聲もあらせず

同胞先に生れ來て

君に負ひたる愛の光の

報は今はまだの聲に

たゞ君の名を呼ばんばかりか

湖山の眺め勝地の遊

思しばらくはらすべく

のぼれば空翠袖を拂ふて

幽怨しづかに潮の如く

遠く東海の空より到る

アルペンの嶺の草花

紅紫千々に匂ふ。

高嶺の夏のなかくに

故山の秋に似たるかな

嗚呼其秋の夕ぐれや

むかしは共に花つみて

淋しき孤館の雨の夜

われ口ずさみ君書きぬ

浮世の秋を知らざれば

籠狭けれど鳥は歌ひき

鳥鳴き花咲き月にほふ

春秋いくたび廻り來て

われや客衣の袖寒く

君や九泉魂いづこ。

逝けりと聞くは夢ならず、
 生けりと猶見る夜々の夢
 懐愴せいきうのあした鳥なきて
 うつゝにかへす無情の叫び、
 擴かひなげし腕は空を抱きて
 魂は呼べども雲白う。
 萬里の遠きアルペンの上
 花つみとりし昔をしのび
 再びあとを紅に
 白に紫つみとれど
 幽明一たび離れては
 いづくの風に傳ふべき。
 あゝ風吹いて雲は東に
 海を越へ山を越へ
 思を孕み虹を吐きて
 東海の空に赴かむ。

西遊の歸期定めねど
 客衣いつかは故山の風に
 さらさんものをあゝ君あらず。
 招ける魂は遠く去りて
 野花青草の嶺のうへ
 佇みのこる影ひとつ、
 見る今サボイの山のうへ
 日はしづかにくだり行き
 烟はかろく森こめて
 下にはるかにローンの流れ、
 東ひかし千山萬嶽のうへ
 雲は漸く眠るべく
 搖曳の影暗きほとり
 一峯抜きて天に入る
 白雪嶺の名も高く

上にははや照る一輪の月。

萬籟しづかにおさまりて

獨り飛虫の羽うつ音

牛羊牧より歸る鈴のね

遠きに聞ゆる異禽の聲のみ。

あゝ今天地は至上の愛か、

微妙を極むる平和の姿

詛ふにあまりにふさしの姿、

あゝわが弟、遂に逝けりや。

※ 藤井宜正氏

※ 畠澤満之氏

ライプチヒ郊外ナポレオン

の記念碑

烟塵天を暗うして

萬軍ひとしく大地を蹴たて

砲彈散彈こくうに吠えて

草木悉く兵なりし

むかしの姿今いづく。

人は空しく過ぎされど

自然の大化過たず

春は大荒に歸り來て

一望遠く青草の野

光は漸く夕に入りて

遙かに一列ポプラの緑

風に靡させていづれに向ふ。

柵に攀ち樹に系り

戯れし無心の子らの群

去りてわが影たゞ残る

田に野に畑に幾度か

鋤き返されて留るは

丸の劍か血を染めて

こゝ肥すべくさらされし

貔貅の数は二十萬。

見よ今震ふ樹の下かけ

鐵柵愁に冷かに

下の青草聲なきに

共に懷古の歌を呼ぶ。

曠世の偉人こゝに立ちて

運命の潮返すべく

胸に湛へし風雲の機、

あはれ堅陣遂に潰えて

なだれを打つて崩れ來し

中にたぢろぐ鷲の大旗

翼は折れぬ、旗裂けぬ。

あゝ明日南三百里

秋のエルバの籠の鳥

あゝ明日ふたゝび百日の

光榮最後の金の冠

あゝ明日是より西百里

ライターローの暮の雲

あゝ明日烟波の沖万里

セントヘレナの墓たゞ一つ。

成敗ものゝ數ならず

横目縦鼻のもの世に湧きて

人と呼び來し數千劫

生ける屍走る肉

世は皆蠢々の塊なるを

ひとり君出でおほいなる

力あるものこゝに見ぬ。

答むる勿れ天の命

詩人の感を深うして

百世君を歌ふべく

最期は悲惨の島の上

波に沈める夕陽の

光は水に消果てじ。

問 答

ユングフラウ

天使焔のつるぎ磨ぐ

わが嶺千古の雪の冠

わが吐く息に大雲暗く

わが吸ふ息に大風おこり

萬岳忽ちあらはれかくれ

千峯互にうなづき答ふ

月はかしらに光寒けく

星はわが腰廻りて震ふ

われおほいなる自然の力

麓の花よ君何と見る。

野 花

いたいけの花びらに

玉より清き朝の露

露は戀なり戀はいのち、

夕 日

あらきあらしにももてそむけ

かゞやく夕日に姿てらし

牧のわらはの胸にかざしれ

旅ゆく人の袖にまつはり

えみとにほひとわが世とこしへ

おほいなる山高き山、

われ羨まず君のほまれを

(おはり)